列島保全への課題

道路整備とモータリゼーションで生活が一変

戦前は、人々の移動は歩くか列車に乗るかにほぼ限られ、ものは船と列車で運ばれるのが大半だった。

戦後、経済成長とともに、わが国にもアメリカやヨーロッパと同じような自動車交通の時代が始まった。１９４５年（昭和20）のわが国の自動車の保有台数は、全国でわずか14万台にすぎなかった。トラックが約10万台、乗用車とバス合わせて４万台という状況だ。長い間、貨物車の方が乗用車よりも多い状況が続いたが、70年（昭和45）に貨物車が８９０万台、乗用車類は９３０万台になり、この年初めて乗用車が貨物車を上回った。

２０１１年（平成23）５月末現在の自動車保有台数は、乗用車類が５８００万台、貨物車類が１５００万台、その他と合わせて７８００万台強となり、今では物流の圧倒的部分を自動車が担っている。

道路整備の状況をみると、モータリゼーションの爆発が始まる前の１９５２年（昭和27）には、幅員が５・５メートル以上あって大型車がすれ違える道路は、国道でも30％程度で、舗装された国道は13％程度にすぎなかった。現在は大型車がすれ違えない国道は５％未満で、ほぼ１００％の国道が舗装され、国土交通大臣が管理する「指定区間」と呼ばれる国道では、改良も舗装も１００％完了している。

しかし、戦後の道路整備は、車が走ってもほこり埃がたたないとか、ぬかるみによる轍（わだち）にタイヤがとられ前進できないといった状況を改善するために舗装したり、大型車のすれ違いやハンドルを切り返さなくてもカーブを曲がれるための「道路改良」から始めなければならなかった。

ものを持ち始めた時代

56年（昭和31）の経済白書には「もはや戦後ではない」という有名な言葉が記録されている。戦後復興を経て、わが国は「経済成長の時代」に入りつつあった。

戦後の高度経済成長期は、私たちがものを持ち始めた時代といえる。

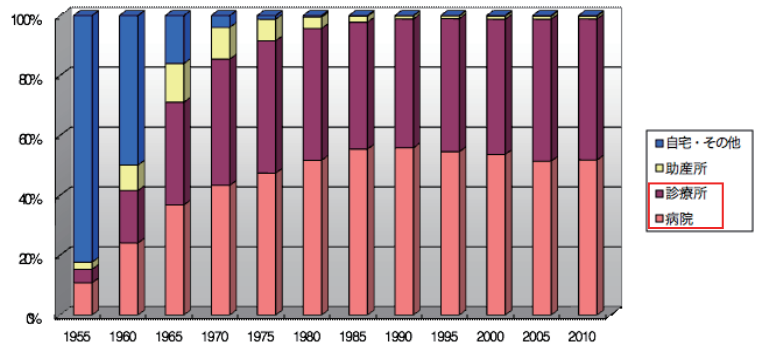
高度経済成長にともない、個人や家庭は急速にものを持ち始め、三種の神器と呼ばれた電気洗濯機・冷蔵庫・白黒テレビが家庭に入り、やがて３Ｃ（カラーテレビ・クーラー・自動車）の時代がきて、家庭がものであふれる状態になった。これがわが国の経済成長を支えたのだ。

同時に、個人の家庭に自動車が入ってきてマイカーの時代を迎えた。わが国の自動車保有台数と自動車走行台キロ（１台の車が１キロメートル走ると１走行台キロメートルという単位。環境負荷や経済活動の大きさを表す指標）と、名目ＧＤＰの変化を重ねたグラフを見てほしい。この間のＧＤＰの伸びを支えた陸上物流の増大は、自動車の走行台キロの増加によって担われてきた様子がよく示されている。

わが国の赤ちゃんの産まれる場所の変化を示すグラフによれば、50年（昭和25）には、赤ちゃんの95％がそれぞれの家庭で産まれていた。産気づいたときに産婆さんが駆けつけ、家で産むのがわが国の有史以来の出産の形だった。しかし、経済成長とともに各家庭に車が入り、いざという時にはマイカーやタクシーで病院等の施設に運べる生活に替わった。その結果、今は99・９％の赤ちゃんが病院等の施設で産まれている。これは私たちが安全な出産を手に入れたことを意味するが、それが可能になったのは、自動車の普及と道路の整備で各家庭が個別の輸送手段を利用できるようになり、産院等と短時間で結ばれるようになったからである。

出生場所の変化

- 個別移動手段である自動車が各家庭のなかに浸透
  ⇒ 病院や診療所で生まれる子供が増加

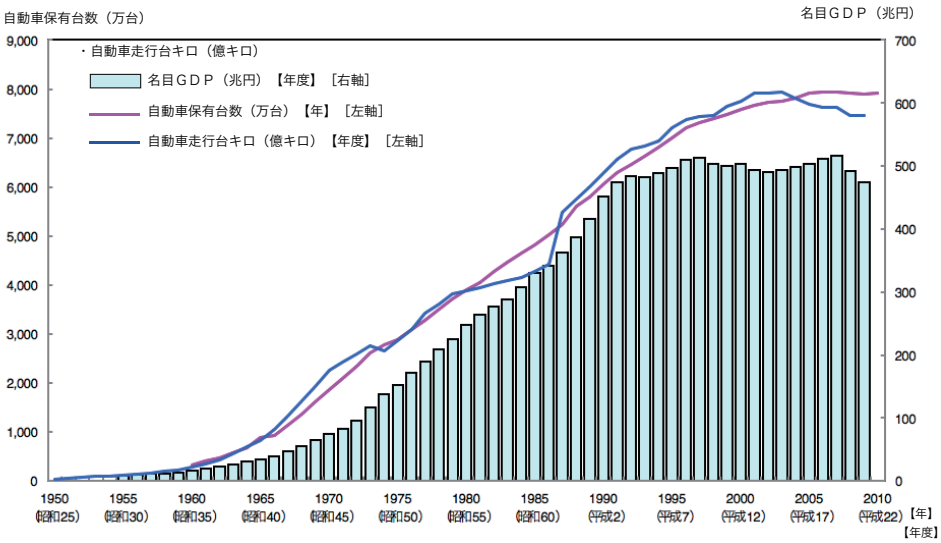


出典：「人口動態調査」厚生労働省　http://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/09/s0905-7d.html　他

わが国、国土への働きかけの歴史⑨

復興から経済成長の時代へ

ＧＤＰと自動車保有台数・自動車走行台キロ



［自動車保有台数］
注1.各年12月末現在
注2.第1種及び第２種原動機付自転車並びに小型特殊自動車を含まない。
［自動車走行台キロ］　※台キロ=自動車台数（台）×走行距離（キロ）
注1.　1987年度（昭和62年度）以降は軽自動車を含む。
注2.　1994年度（平成6年度）の数値には、1995年度（平成7年度）1月～3月の兵庫県の数値（営業用バス等を除く）を含まない。
出典：自動車保有台数－「交通安全白書2011」他、自動車走行台キロ－「道路交通統計要覧　平成17年版」（P142）、「交通安全白書2011」他
名目GDP年度－「国民経済計算年報」　1955年～1979年（旧68SNA・1990年基準計数）

碑（いしぶみ）の記憶⑦

大津浪記念之碑

岩手県陸前高田市
米崎町沼田

沼田公民館前に明治29年と昭和８年の２度の大津波の予兆や被災記録を刻んだ高さ２メートル幅89センチの碑が建つ。

碑文は表に５条の教訓、裏に被災の状況を刻んでいる。

■碑文の表

不意の地震に不断の覺悟
大津浪強い地震の後に來る
地震後引く潮津浪と思へ
津浪と思はばすばやく知らせよ
避難には慾得はなれて皆丘へ

■碑文の裏（概要）

一、明治29年６月15日（旧５月５日）午後８時地震後大津浪あり。村内倒壊家屋18軒、死者11名、負傷38名
一、昭和８年３月３日（旧２月８日）午前２時頃大地震続いて沖に大音響あり。後干潮甚しく、同２時半頃大津浪襲來。倒壊家屋12軒、死者８名、負傷者３名

国土と日本人

災害大国の生き方

大石久和著

本書では日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、に気づくことの出来る好著。

発行：中央公論新社
定価：882円（本体840円）